

【序章】

現代の学校教育には、いじめや不登校などの多くの学校病理現象が発生している。その原因には、生活スタイルの変容に伴って友達同士で遊んだり家族で会話する機会が減ったことによる、コミュニケーションの不足があると考えられる。なぜなら、日常的に誰かと言葉を交わす・気持ちを伝えるという、生きていく上で大切な能力が十分に養われないため、対人関係において円滑な関係を築いていくことができず、学校病理現象へと発展すると推測されるからである。このような現代において、仲間との協力や連携を強調している体育授業には、コミュニケーションを経験し、ソーシャルスキルを向上させ得る方法であると考えられる。そこで、学校病理現象の実態を明らかにし、その背景や原因を考え体育授業による問題解決の可能性を検討していきたい。

【第一章】 学校病理現象の現状

学校病理現象の現状や推移について調べる。意外なことに、いじめ・不登校の生徒数は2002年あたりをピークに減少傾向にある。しかし、その一方でネット社会が進み、教師の目につきにくいところでいじめが発生しているという現状もある。さらに、いじめはクラスの子どもの立場によっては、非常に沈黙化しにくい場合がある。また、不登校に陥る原因としては、その子どもの性格や家庭環境、生き立ちなどの様々な要因が関係していると示唆されている。よって、一概にいじめや不登校の生徒が減ってきたとはいえ、依然として発生件数は高いと考えられる。

【第二章】 学校病理現象の背景

現代の子どもたちは、遊び場の減少や習い事などに時間をとられてしまい、放課後に友達と遊ぶ時間や、休日に家で家族と過ごす時間が、その子どもたちの親の世代と比較して明らかに減少してきている。このような、時間・空間・仲間の「3つの間」が減少している状況では、日常的に誰かと会話したり意思疎通

を図ったりすることがなくなるので、結果としてコミュニケーションの機会が充実せず、人間関係においてストレスを増幅させてしまうのではないかと考えられる。また、幼少期は親からの愛情を受け、人に対する基本的信頼感を形成していくという重要な時期であるが、このときに安定した愛情を受けられなければ、その後の人生における対人関係に問題が生じる可能性が高いと言われている。

【第三章】 体育授業によるコミュニケーションスキル習得の可能性の検討

体育授業は学習指導要領にも記載されているように、互いに協力したり自己の役割を果たすなどの社会的スキルを習得することを目標としている。実際に体育授業における社会的スキルの習得を検討した研究によると、体育授業において、日常的に高い目標を持って部活動をしている生徒たちと、部活動をしていない生徒たちの双方に、自己開示や挑戦達成などのスキルにおいて向上したという結果が得られた。特に、普段から何かの目標に向かって取り組むような活動をしていない生徒たちには、挑戦達成による社会的スキルの習得が著しいという結果が明らかになっている。

【結章】

現代の子どもたちは、日常的に他者との関わりが減ってきており、家族や友達などの身近な存在である人とさえもコミュニケーションの機会が減少してきている。そのような現代において、体育授業のなかで他者とのコミュニケーションを繰り返すことによって、人間関係におけるストレスを軽減させ、豊かな学校生活を送ることができると考えられる。しかし、社会的スキルを習得するには、体育授業に意欲的に参加させることが重要であり、体育に苦手意識を持っている子どもたちを、どのように授業に参加させるかという方法論の検討が、今後の課題となってくる。